

---

# ある晴れた梅雨の日の放課後にてうんぬん

witte

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある晴れた梅雨の日の放課後にてうんぬん

### 【Nコード】

N9857T

### 【作者名】

Wittte

### 【あらすじ】

誰にだって、抗えない何かはあるものでしょう

そうじ たかひろさん主催の企画『しずくとつむぐ』参加作品です。

(前書き)

そうじ たかひろさん主催の企画『しずくとつむぐ』参加作品です。

日本語としておかしいところが多々見受けられるかもしれませんが。

その時は優しい気持ちでスルーしていただくか、もしくは「こりや変だよ」って文句をつけてやってください。

どうやら彼こと梅原雨は、異性に好まれる顔立ちをしているらしい。

登校し下駄箱を開ければ、沢山の恋文が鳴りを潜めていて。

街中を歩けば、その都度3回は女性に声を掛けられる。

極めつけは去年の出来事。高校一年生の夏、たまたま近くの商店街で行われていたテレビの収録（レッツ買い食い ワンコイン商店街）に、これまたたまたまその愛くるしい御身が写ってしまい、その事後は放送局への『あの麗しく母心をくすぐる白眉なる美少年は一体誰なんだ！ 教えるください！』といった問い合わせが引つ切り無しにかかったというのだから、呆れてしまう。

現在時系列は6月真つ只中。しかしながら空気はじめじめと湿気を含んだものではなく、カラリと渴いた湿度を保っていた。

そんな中、張本人梅原雨は放課後の廊下を一人歩いていた。彼は今朝、もはや恒例行事ともなってしまった『パンドラの箱よろしく下駄箱を開くと、そこには便箋の山がそびえていた』イベントを行い、足元へなだれ込んでくる雪のように白いラブレター共をどうしてやろうかと考えていたところ、その白い固まりのなかで目に留まるものがあつたのだ。

水玉模様の便箋。封をしているのは可愛らしいポップなうさぎのシール。

いつもなら、このような手紙の類は例外なく読まずに処分してしまうのだが（最初のうちは几帳面に全て目を通し返事をしていたものの、その返事目的で何度も手紙をよこす女子が後を絶たなかったため）、何となく、無意識に、その便箋だけはポツケに入れてそそくさと教室へと足を運んだ。

午後の授業を終え、その手紙を開封。内容は簡素なもので、『放課後、図書室の日本文学コーナーで待つ』という、解釈次第では果

たし状ではないのかと疑えるようなものだった。

仲のいい友達となんてことはない与汰話に花を咲かせて、昇降口へ。咲いた花はアジサイだろうか。帰路へ着く彼らとそこで別れ、そして今に至る。

彼は内心、ワクワクしていた。いつもとは一風違った、個性のないあの手この手を嫌って、あの気この気を銜った便箋に。しかし彼の答えは決まっている。お断りするのだ。でない、今までフツてきた女子の面々に申し訳ないじゃないか。そういったよくわからない責任感があったのだ。

そんな心持ちで図書室へ到着。スライド式の扉をガラリと開き、入室。あまり図書室に足を運ばない彼は室内見取り図を確認して、手紙にあった日本文学コーナーへ。丁度そこは角に設けられていて、本棚がいい感じに視線の遮蔽となっていた。告白には持って来いなポイントだなあ、なんて呆けながら歩みを進めると、いた。一人の女子が、彼に寄越したものと同じ水玉模様の便箋を手に持ち、凜とした佇まいで立っていた。

スラリと伸びた肢体を隠すように綺麗にブラウスを着こなしていて、この年頃の女性特有な胸の膨らみが伺える。隠れきれず外面に晒された手や首筋は些細な拍子に折れてしまうのではないかというほどに細く、さながら太陽を包み込む雲のようにきめ細やかな白を努めていた。背は平均よりもやや低めだろうか、しかし弱々しさは感じ取れない。丸みを帯びて尖った両肩はまるでナイフのようで、どこか誘惑的な危うさを能動的に振り撒いている。小さい顔によく似合う、小さい唇。対照的に、大きく潤んだ茶の瞳。細い眉は揺らく前髪によって見え隠れを繰り返し、覆う髪は差し込む陽光に似た限りなく黄に近いブラウン。校則に則って、伸びた後ろ髪を可愛らしいアーガイルチェックのリボンでポニーテールに仕上げている。と、彼女が彼に気付く。

ニンマリと小さな口元を僅かに吊り上げて、目を爛々と綻ばせて向日葵のように笑ってみせた。

「初めまして、梅原くん。夏目晴なつめはれつていいいます」

温もりを孕んだ柔和なその声で、彼女は彼に語りかける。

「突然だけど、この前あなたに一目惚れしちゃいました！……私なんかでよかつたら、付き合ってください」

彼が今日までに何度も耳にした、告白における常套句。いつもは移り行く季節のように両の耳を滞りなく流れるその台詞は、しかしながら今回は彼の頭に留まった。それは何故か。わからない。それには彼自信が一番驚いており、不適な、不適切な笑みを浮かべている彼女を前にして、だらし無く膠着してしまっている。

お断りすることが、できない。

理由は彼女が可愛いから ではない。

確かに彼女の外見みくれは大層に良い。今まで彼に告白してきた女子の中でも、群を抜いていると言っても過言ではないだろう。しかし、絶対にそんな事ではない。そう彼は確信できた。

不公平な使命感。何やら正体不明のハンディキャップを背負わされているかのように、彼から選択肢が奪われている。

告白の返事を選択肢。

一つ奪えば残るは一つ。

訳がわからないままに、黙って彼は、こくりと首を縦に落とした。「やたっ！ 嬉しい！ じゃあ、今から私たちは恋人同士だね！

良かった良かった、今日も世界は平和だねっ！」

くるりと態度を改めて愉たのしそうにハグを繰り出し、天窓から祝福の西日が二人を差した。

「あのお……」

「ん？ どうしたのマイダーリン」

「マイダーリンはやめて」

「はいはい。で、どうしたの？」

「あの日さ……晴が僕に告白してきた、あの日」

あれから一月が経ち、健全な高校生は夏休みを満喫している。彼らもまたそれにあやかり、ちょっぴり遠出をしてフラワーガーデンに赴いていた。

一面に咲く向日葵は、まるであの日の笑顔を彷彿させてしまう。だからという訳ではないのだろうけれど、唐突に彼は切り出した。「どうして僕は、晴を断れなかったんだろう」

あの日から一度も頭を離れなかった疑問。何をどう考察したところで、納得のいく答は導き出せなかった。

「え？ ……ああ、なんだそんなことが。そんなの決まっているじゃない」

周りに咲き誇る向日葵も顔負けの笑顔を浮かばせて、彼女は自信満々にこう答えた。

「だってあの日は、降水確率0%だったんだから」

(後書き)

初めまして。w i t t eと申します。普段は主に二次創作をメインに執筆しております。

さて、えっと……とりあえず本文末の意味不明なセリフの補足、雨くんが断れなかった根拠……的ななにかについて。

降水確率が0%だった 雨が降る確率が0%だった 雨(このお話の登場人物)がふる確率が0%だった 告白大成功！

……という、まあ本当にくだらないオチだったりしたわけですが；  
落語かよっ！ ……っっていう……ね。

当初は『高校二年生のある梅雨の日。放課後、図書室の日本文学の棚前に呼び出された僕は、名前も知らない女の子から告白された』というテーマの穴を突くことを考えて、「なにも『僕』というのは男子でなくてもいいんじゃないか？ ……そうだ！ 性転換トリックだ！ ボクっ娘を主人公にした一人称を書こう！ うんコレだ！」といった短絡的思考のもと、そんな作品を書いてました。しかしながらいかんせん僕は未熟者でしたので、登場人物を魅力的なキャラクターに仕上げる事が出来ませんでした……；

ねえ、もう、本当に……

どうかどなたかそんな作品を書いてください！ (切実)

閑話休題。

勢いのまま思い気のままに書いた作品ですので、最初は文字数がえらいことになっちゃいました。削るだけ削ったので、文脈に違和感を覚える方もいらっしやるかもです。

それは僕の技量不足に難があるだけですであしからず。

とにかくも、とても楽しんで執筆することができました。

この機会を設けてくださったそうじ たかひろさんに多大なる感謝を！

企画参加は初めての体験でしたのでちょっと空回ってる感も否めませんが、そして梅雨がテーマなのにうっかり晴れちゃってますが、そこらへんは他の皆様の素晴らしい作品で堪能しちゃいましょう！  
(丸投げかい)

少しでも楽しんで頂ければ冥利に尽きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9857t/>

---

ある晴れた梅雨の日の放課後にてうんぬん

2011年6月11日01時25分発行